

# 「半分、青い。」の岐阜東濃方言

Gifu Toonoo Dialect used in “Hambun, Aoi.”

山田 敏 弘

YAMADA Toshihiro

lingua@gifu-u.ac.jp

## 1. はじめに

NHK 連続テレビ小説「半分、青い。」は、2018年4月2日から9月29日まで放送された、同シリーズ第98作目の作品である。岐阜県東濃地方にあるとされる「東美濃市<sup>ふくろう</sup> 梶町」が舞台との設定で、岐阜県内でも多くの場面で撮影された。脚本は、岐阜県美濃加茂市出身の北川悦吏子である。Wikipedia「北川悦吏子」(2018/9/19 確認)によれば、北川は、岐阜県立加茂高校卒業後、地元を離れ早稲田大学第一文学部に在籍したのち、1990年代に多くのトレンドドラマの脚本を手がけている。

今回、北川が自身の故郷である岐阜を舞台としたドラマの脚本を手がけるということになり、岐阜の方言が多く用いられる作品となった。ただし、地方を舞台とする多くのドラマが、当の舞台地域で違和感をもって受け止められるなどは、NHK 連続テレビ小説 74 作目の「純情きらり」で、舞台の「岡崎」を東京式の中高型アクセントで呼んで不評を買ったことをはじめ、毎回のことである。とはいえ、全国で放送されるドラマに、舞台となる地域で実際に話される厳密で完璧な方言使用が求められているとも言い切れない。そもそも、ドラマにおけるひとつの特徴でしかない方言について、特段、騒ぎ立てるほどのことでもない。

本考察では、上記のドラマにおける方言の位置づけを理解した上で、今回、岐阜県を舞台にした NHK 連続テレビ小説「半分、青い。」において、どのような方言的特徴が観察されたのか、どのような近似方言が用いられたのか、また、それはなぜ生じたのか、さらに、岐阜県内ではどのように受け止められたのか、などについて、調査・考察して記録に残す。

資料は、毎回のドラマ視聴に加え、NHK ホームページ「半分、青い。」(<https://www.nhk.or.jp/hanbunaoi/>)の週ごとのあらすじ編集分(各週 5 分)と、ほぼ毎回、台詞を正確に書き起こしてあるウェブサイト「テレビネタ！」(<https://tvneta.info>) (ライター:許してちょんまげ氏)を参考にした(いずれも 2018.10.1 確認)。

## 2. 東濃方言の特徴

「半分、青い。」が舞台としているのは、「東美濃市」である。この架空の名称から、いわゆる東濃地方であると推察されるが、東濃の定義は曖昧である。岐阜県が公表している行政区画としては、右図に示すとおり、西から、多治見市、土岐市、瑞浪市、恵那市、中津川市である。ほかに、多治見市・土岐市の北にある可児市と可児郡御嵩町が東濃に含まれる場合もある。岐阜県立東濃高等学校、ならびに、同東濃実業高校が御嵩町にあり、可児市長も、可児市ホームページ「ようこそ！市長室へ」で、「東美濃～新たな可児市の個性づくり」(2017年10月30日)と題し、「東濃6市」、「東濃7市町」の連携を呼び



地図1 岐阜県東濃地方の位置づけ

かけるなど、東濃との意識が広くある。

方言的にどうであるかと言えば、隣接地域から東濃だけを切り離す明確な証拠は挙げにくい。東濃方言の代表格として挙げられる「ヤラー」についても、中濃地域、あるいは、岐阜市近辺でも使用が認められるなど、東濃に限定される表現ではない。多治見青年会議所が作成している方言番付表に「横綱」として見られる「ノオ（終助詞「ね」）」と「インネ（否定応答詞）」も、前者は県全域さらには全国に見られ、後者は西濃、中濃にも広く見られるほか、東北から九州まで観察される。わずかに、同番付の小結に位置づけられる「トロー（ばかな）」や前頭の「エラー（疲れた）」などに見られる、連母音「オイ」「アイ」の長母音化は、多治見市から瑞浪市までの旧土岐郡に観察され「東濃方言」を特徴付けるが、やはり北接する加茂郡八百津町でも聞かれるなど、東濃に限定される特徴とは言えない上、東濃東部旧恵那郡の2市 恵那市と中津川市では聞かれない。厳密な「東濃方言」の外延を描くのは、容易ではない。

もちろん、東濃に限定して使用される語句を東濃方言と呼ぶのでないことは、方言学を知った人間であれば当然のことである。ただ、その地域で使われるすべての語彙をその地域の方言とするという考えは、まだ一般的でない。その地域にのみ存在する俚言をその地域の方言と呼ぶとの勘違いから、「他の地域でも使われるから、あれは東濃方言でない」という批判的射を射ない。たとえ、「ヤットカメ」が多治見の方言番付表にあったとしても、それが名古屋で聞かれるからといって、多治見方言でないというのは間違っている。つまり、多治見市で使用される語句であれば、それは多治見方言なのであり、東濃地方で使用されれば、すなわち東濃方言であるということである。今回も、東濃で話される特徴について述べていく。

一般に「東濃方言」の特徴として挙げられる点は、以下のようなものである。

- ① 1拍名詞第2類「名」、「葉」、「日」は、東京と同じく、アクセント核のない型である。東濃以外の岐阜県内では、語末にアクセント核がある。
- ② 東濃西部において、連母音「アイ」「オイ」「ウイ」は融合せず長母音「アー」「オー」「ウー」となる。ただし、これは、可児郡・加茂郡や瀬戸市など愛知県尾張地方北東部にも連続する特徴である。
- ③ 東濃南部、特に旧恵那郡南部（岩村、山岡、明智、上矢作、串原）において、指定辞に「ダ」を用いる。恵那市や中津川市中心部でも「ダ」と「ヤ」が併用されることがある。
- ④ 語彙に関して、東濃に限定された語句を見つけることは難しい。

これらの特徴に加え、近隣地域と連続する特徴が、東濃方言を形成する要素となる。

さらに考慮すべきは、東濃方言の変化である。東濃西部の多治見市などは、名古屋からの通勤圏としてニュータウンも形成しており変化が著しい。一方、その影響は東濃全体にも及び、伝統的な方言だけで東濃を語ることは、もはやできない。年代差も考えながら考察することが望ましい。

### 3. 「半分、青い。」の音声・音韻的特徴

ドラマにおいて、もっとも方言らしさを表現し、かつ役者が演じこなすことが難しいのは、アクセントをはじめとした韻律特徴であろう。語彙は、脚本家が選択可能であり、ドラマにおいて用いられたとしても象徴的に限定されて用いられるが、アクセントなどは、すべての語彙・文法表現に被さる韻律特徴であり、もっとも特徴的に方言を表現する。なお、文中の●は高く発音される音節、○は低く発音される音節である。

今回のドラマで頻用されているのが、「アリガト」である。共通語においては「ありがとう」が「○●○○」の中高型で発音されるが、当地では2音節目も低く3音節目だけが高く発音される「○○●○」が基本である。ドラマ中、何度か使用された「オメデト」も同様に「○○●○」である。今回、自らも「半分、青い。」に高校教師役として出演した俳優であり岐阜県土岐市出身の尾関伸次氏が、出演者に細かいアクセント指導をしたことばのひとつである（2018.8.31NHK「あさいち」）。

ほかにも、律（子役）も、「ナンデ、カワナノ↑」（第4話）と疑問を呈する部分で、「○●●、○●○○↑」と言ったり、律が、「名古屋」を「○●●」（第22週複数話）と言ったりするなど、出演者の多くが用いることばに、当地のアクセントが十分に感じられるシーンは多い。

一方で、やはり、なぜこのアクセントなのかと不審に思う箇所も少なくない。第24週 鈴愛「ワルカッタ」(○●○○○)は、共通語の「●○○○○」とも岐阜の伝統的な「○○●○○」とも異なるが、若い世代では、2音節目が高い型も使用されることがある。この週の話は、東京での扇風機開発に関わる展開で、幼なじみである律に向かって言う場面である。共通語も方言もどちらも使用される可能性がある場面であり、ここで実現されているアクセントは、岐阜方言の伝統的なアクセント型ではないが、逆にこの場面にふさわしいアクセント型であるとも言えるのかもしれない。

同じ週に聞かれた、主人公鈴愛の母である晴が言った「ナニガアッテモ」(●○○●○○○)は、やはり共通語につられた可能性が指摘される。岐阜では「何」「どこ」「誰」などの疑問詞はすべて平板型であり、助詞を伴った場合、2音節目も低く発音され、さらに後ろに頭高型の述語が来ることで、「○○○●○○○」と「ア」だけが高く発音されるのが、すくなくとも晴の世代においては、一般的であると考えられる。また、鈴愛が扇風機のアイディアを思いついた場面で、「コレヤ」を「○●○」と指定辞を低く発音する箇所にも違和感がある。「コレ」は平板型アクセントで発音され、後続する指定辞は助詞と同じ振る舞いをする。すなわち、「コレヤ」は、「○●●」となるはずである。

このような違いを挙げていけば、おそらく毎話複数箇所が見つかるのであろう。しかし、それ以上に、当地岐阜の方言アクセントが使用されていることを考えると、割合の問題でしかない。当該方言話者以外の視聴者にとっては、当地アクセントの使用があるということが、方言的脚色において必要なことであり、完璧な方言アクセントは、それがたとえ地元話者に求められるものであっても、全国では求められていないことだからである。

ただし、意味が異なる場合には、要注意である。今回、主人公の口癖として、失敗した際の「ヤッテマッタ」が頻用されたが、これは、「○○●○○○」でなければならない。「○○●●●●」となれば、他者に依頼して恩恵的動作を受けたことを表す「やってもらった」の意味になる。この混同は今回聞かれなかったが、律の母である和子さんが「食べてかん？」と勧誘するシーンで用いられたアクセントには違和感があった。「タ」が高く、その後低く推移して「ン」が上昇調となるイントネーションで発音されたのである。

- ・ <sup>すずめ</sup>鈴愛：あつ、おばちゃん！
- 和子：これからおやつにするの。食<sup>く</sup>べてかん？ (第4話)

当地では、「タ」が低く、その後高く推移し「ン」がさらに上昇調となる勧誘表現が一般的であり、このイントネーションだと「食べていけない」か否かを問う意味と受け止められてしまう。

イントネーションについては、第128話で、鈴愛が、商品の権利を譲ってほしいと言われたシーンで用いた「ドューコト」(●●●●●●)など、当地のイントネーションを正しく用いられている場面も多い。この、「ドューコト」は、最後の「ト」が急降下する。これは、頻用される「何？」も同じで、「ナニィ」は、「○●」と発音されるのが通例である。このことによって、少し強い質問、場合によっては詰問となる。アクセントほどは着目されないが、実際には、このような急激な文末での降下イントネーションが、岐阜方言の大きな特徴なのであり、それがドラマでは随所で適切に表現されていたことを見落としてならない。

さらに、今回、もっとも難しいと感じられたことが推察されるのは、文字には現れない長音、すなわちリズムであった。上述のアクセントやイントネーションは、ドラマ出演者によって表現されようと努力がなされていたが、このリズムはそれほど重視されていなかった。このリズムの違いが、方言母語話者にとって、やはり言い様もない違和感を与えた原因となったと考えられる。たとえば、「アリガト」のような3音節目にアクセント核が置かれる場合、語頭音節と3音節目はやや長めとなる(語頭は付点八分音符で2音節目は十六分音符の長さ。3音節目は語頭ほど長くないが音節中で下降が感じられる)。この違いがなく八分音符のリズムで3音節目だけを高くしても、岐阜方言らしい発音とはならない。

このようなリズムをかぶせたアクセントが際立っていたのは、土岐市出身のお笑いタレント、神無月の台詞であった。「ナーニ、ゴーメンネー」(第108話)は、「ゴ」の後に短い長音が入ることで、当地らしさがみごとに表現されていた。

このような、音の特徴は、語彙や文法形式のような有形的特徴ではないため、どうしても個別に学習するしかない。そして、それをドラマ出演者が完璧に演じることもない。一方で、上述のように、ドラマという性質からすれば、絶対必要な言語特徴とも言い切れない。

もうひとつ考えておかなければならないのが、同じ人間が常に同じ方言アクセントを用いているかという点である。萩尾律役の佐藤健がインタビューで「今回のドラマは、それぞれのキャラクターによって岐阜ことばの強さが違います。このシーンは標準語、このシーンはなままってほしい、みたいなこだわりが、北川さんにはあるようで」(NHK「半分、青い。」岐阜放送局ご当地サイト「Message 岐阜のみなさんへ～出演者からのメッセージ 2018.9.14」)と述べているように、シーンによって同じ人物でも、共通語になったり方言になったりのスタイルシフトは、日常でもある。有形形式の切り替えについては後述するが、アクセントやイントネーションなどの韻律特徴においても、そのような切り替えは起こりうる。たとえ、それが地元のシーンであっても、意識が東京にあれば、東京式の韻律特徴が観察されることもある。この人は出身が岐阜だからと言って、岐阜方言のアクセントだけを使うわけではない。この意識が明確にあった。

韻律特徴以外の音韻的特徴については、「赤い」が「アカー」となるような、連母音の後部母音消失による長母音化が見られないということも挙げられる。東濃地方は、この特徴によって二分される。すなわち、連母音の長母音化が見られる西部の旧土岐郡地域(多治見市、土岐市、瑞浪市)が舞台ではなく、同現象が見られない東部の旧恵那郡地域(恵那市、中津川市)が舞台となっているということが窺われる。実際、幼少期に過ごした梶町は、恵那市岩村町がロケ地である。ただ、中濃地域にある美濃加茂市でも、このような連母音の長母音化は用いられず、単に、岐阜県内でも限られた地域にしか見られない音韻的特徴がシナリオに現れなかっただけである可能性も捨てきれない。

このような音声・音韻的特徴は、毎日耳にする特徴であり、それだけに違和感にも気づきやすい。ただ、作品全体で見れば、十分に音声・音韻的特徴の活かされた作品であったと言えよう。

#### 4. 「半分、青い。」の語彙的特徴

多くの地方を舞台としたドラマでは、語彙の解説をその都度付すことは煩雑であるとして、特徴的な語句(俚言)や文法表現を限定的に使用する傾向がある。文法表現については次節で詳述するとして、ここでは語彙に限定して述べるが、たとえば、有村架純主演NHK連続テレビ小説「ひよっこ」では、無アクセントや語中の清音の濁音かななどの音韻的特徴に加えて、文末の「～ダッペ」など、汎用的な特徴のある表現は使用していたが、特徴的な語彙としては罵り言葉の「ゴジャッペ」など、限定的に用いられた。すべて俚言としなくとも、方言的要素がちりばめられれば十分だからである。

今回考察の対象としている「半分、青い。」においては、次のような俚言が用いられた。

- ・ 鈴愛：フフフ... けなるい。
- 菜生：けなるいやろ。うわっ、何で匂い嗅ぐ？(第16話)
- ・ 鈴愛：本当は私だって、けなるいよ。
- 藤堂：けなるい？
- 鈴愛：うん。岐阜弁でうらやましいの切実なやつ。いてもたってもおれんぐらいうらやましいことを言います。けなるい！(第64話)
- ・ (祐子心の叫び) けなるい！(第67話)
- ・ (ナレーション) お昼休憩中の津曲が、それをけなるいそうに見ていました。(第140話)

「ケナルイ」が「うらやましい」と比較して強い願望を表すという主観は、個人差があるであろう。古語の「異なり」に由来するという語源から考えれば、「うらやむ」という動詞もある「うらやましい」ほど強くないという捉え方も地元にはある。なお、第64話の「ケナルい」については、語幹を長母音化したものとして、程度の強さを感動詞的に表現する際に用いられるものである。

さらに、第67話で、岐阜出身でない祐子まで使用しているのは、東京でのアクセサリ的な(小林2004など)方言使用も印象づけるし、昇天した祖母の語りとしての特徴をもつナレーションでも用いることで、「ウリにした」というしたたかささえ見え隠れする。それほど、「ケナルイ」は、今回、岐阜方言の象徴として用いられた。実際、「ケナルイ」は、東濃地方を含む岐阜県全体のみならず、隣県愛知県を含め、日本国中かなり広く用いられており、岐阜県だけの方言ではない。ただし、岐阜県でも使われるれっきとした「岐阜弁」であり、広く共有されている俚言である。象徴的に用いる岐阜方言として、適切な選択であったことは間違いない。

その他の岐阜方言として用いられたのは、次のような語・表現である。

- ・ 草太：アチッ！ お母ちゃん チンチンや！（中略）  
涼次：チンチン...？  
鈴愛：あっ 沸騰しとるって事や。あっ違うな。そこまでやないな。沸騰はしてないけどすごく熱いっていうことをこっちの方ではこう言います。（第90話）
- ・ 和子：「ヤットカメやねえ。いつ以来や？」（久しぶり）（第110話）
- ・ 鈴愛：どうしよう律。律とこんなになってまうなんて何かものすごい気持ち悪い。  
律：気持ち悪い言うな。  
鈴愛：じゃ、所在ない。何かムズムズする。あのカキ氷食べてキーンってする感じや。おばあちゃんが言う言いよった。からすない。  
律：からすないって感じか。そりゃあかんな。（第148話）

いずれも、ドラマの中ではテロップで註が示されるか、登場人物によって解説がなされた。すなわち、注釈なしでは理解されないことが理解された上での使用である。

もちろん、これらの語についても岐阜県東濃地方以外で用いられないわけではない。沸騰する鉄瓶の音に由来し沸騰する様を表す「チンチン（平板型アクセント）」は、『広辞苑』にも載るし、「ヤットカメ」も、岐阜県内では飛騨北部を除いて広く用いられ、愛知県や三重県でも使われる方言である。ただし、「チンチン」は、本来、沸騰する鉄瓶の音に由来するため、主人公鈴愛の解釈は、正確でない。

その中で、「カラスナイ」は異例である。岐阜県内でも「カラスナイ」ということばは見られず、県内にも記述はない。岐阜県内で使用される形式は、飛騨地方を中心に用いられ、郡上から中濃南部にかけて散見される「カラスガイ」である。岐阜県ではガ行鼻濁音が一般的であるので、この「カラスナイ」は「カラスガイ」の異形態であると考えられる。この語に関しては、NHKのプロデューサーからも「岐阜県方言か」との問い合わせがあり、脚本家自身の家で用いられていた記憶から使用された旨、聞いた。よく、地域で調査をしていると、自分が使わない理由で、方言に「間違い」を言い張る人がいるが、一方で、家庭ごとの微妙な語形・用法の差異も観察される。方言語形に見られる使用の多寡は、正解・不正解ではない。「カラスナイ」は、存在しうる異形式なのであろう。

次の接尾辞もそのような用法の揺れのひとつであろうか。

- ・ 宇太郎：うん。あいつがデビューしたときはこの本棚、ぜーんぶその本でいっぱいにする。鈴愛の本まるけや。  
晴：フフフ。鈴愛の本まるけか。  
テロップ：「まるけ」≡「だらけ」岐阜弁標準語  
晴：お客さん鈴愛の漫画しか読めんか。（第64話）

「マルケル（丸める）」から派生した接尾辞「マルケ」は、一見、共通語の「だらけ」に対応するように思われるが、「漫画だらけ」を「漫画マルケ」と言えるかには賛否ある。伝統的な方言集に載る用例としては、「泥マルケ」、ならびに「草マルケ」、および「灰マルケ」のような細かい物が附着する例が見られるくらいで、固形物が

豊富にある状況を指す場合の用例は見当たらないし、岐阜市出身の筆者にも違和感がある。

この他に、今回のドラマでは、次のような拡張された方言使用が見られた。

- ・ 岩堀製作所担当者：これうちで作れって？ ハハハハハッ…。資金あんの？ 本当売れんの？ 売れなかったらうちに金払えないって訳でしょ？ お嬢ちゃんこの業界長いの？  
鈴愛：チャホヤ粉とかマーカン袋とか。(第147話)
- ・ (別れ際) 律：ほんならな。  
鈴愛：うん。(第131話)
- ・ 律：完成した。  
鈴愛：ふぎよぎよ！  
律：何でお前が先入るの。  
鈴愛：ふぎよぎよ！ これらは何や？  
律：永久機関。永遠に動き続ける装置だ。(第4話)

「マー(ア)カン」は、「もうだめだ」の意味である感嘆表現である。その通り、危機に陥った際に叫んだりもするが、堪忍袋の緒が切れた際にも用いられる。ドラマの中では、この表現を用いて「堪忍袋」の意味で「マーカン袋」と命名している。実際には、「堪忍」が「マーアカン」に相当するわけではないが、このような方言を用いて商品を命名しようという手法がドラマ中に示されたことは、注目に値する。一方、第1話でも、分娩室で苦しむ晴が「マーアカン」と叫んでいるが、若い世代では、このような「もうだめだ」の意味で使用することに違和感を持つ学生もいる。使用自体が少なくなり、使用場面の限定がされてきている可能性もある。一口に「岐阜方言」と言っても多様な言葉に、どう照準を合わせていくか、困難があったであろうと推察される。

次の「ホンナラナ」は、別れの挨拶として「じゃあね」を訳したことばと考えられるが、岐阜市出身の筆者は実際には耳にした記憶がない。「ホンナラ」が、「それなら」の意味で用いられる接続表現であり、別れの場面で用いることがあるとは理解するが、終助詞の「ナ」との併用は、やや奇異に感じられる。東濃方言であるか委細は不明であるが、方言として周辺の用法である可能性もある。

最後に「フギョギョ」であるが、これはまったくの脚本家による造語のようである。方言として岐阜で用いられたことはないが、感情を表す感動詞は、臨時的に用いられることもあり、また、世代の差やその人の人生の中でもやはり廃りがある。筆者自身、中学生の頃は「ゲゲッ」と驚いていたし、はやりのテレビからの「ゲロゲロ」が高校生の頃には使われていたことを記憶している。NHK連続テレビ小説第88作「あまちゃん」で用いられた「じぇじぇじぇ」の柳の下での2匹目のドジョウを狙ったと揶揄されることもあるが、そもそも、感動詞は、創作か否かを問うこと自体、無意味である。

## 5. 「半分、青い。」の文法的特徴

汎用性がある文末表現は、ドラマでもご当地を印象づける特徴として頻用される。

今回のドラマで頻用された助動詞表現は、わずかに否定の「ン」と指定の「ヤ」のみであった。

まず、否定から見ていくが、否定辞としては、「ン」のほか「ヘン」も用いられている。

- ・ 貴美香先生：うーん…なかなか下りてこんねえ。(第1話)
- ・ 鈴愛：もうおばあちゃんはおらんか。話せんか。さみしいな…。(第8話)
- ・ 宇太郎：晴さん産んでから、まだ2日しかたつとらへん。(第1話)
- ・ 渡し舟屋：あーごめんね。今日ね、風強いもんで、舟出せへんのよ。(第5話)

「ン」の用例は数限りないが、「ヘン」は相対的に少ない。ただ、一段動詞に「ヘン」が付いた場合、東濃地方の高年齢層では「ダセーヘン」のように、「ヘン」の前は長音になるのが一般的である。第5話の渡し舟屋の発言も、実際には、「セ」のあとに短い長音が聞かれた。否定辞の「ヘン」に関しては、岐阜県内において、この半世

紀で完全にふつうの否定辞となっていることにも注意しなければならない。渡し舟屋の「ダセヘン」にも強意の意味はない。

否定の過去形については、鈴愛も「～ンカッタ」の形を、ふつうは用いているが、ときに、「～ナンダ」の形も用いる。

- ・ 鈴愛：これ焼けとる。まさか耳の事で落とされるとは気付かなんだ。(第29話)
- ・ 仙吉：ああ。ほんでまた鈴愛は殊の外強いぞ。  
鈴愛：ほうか。知らなんだ。(第80話)
- ・ 鈴愛：ああ... あの時の岐阜犬は20万個の大ヒットになった。それに気をよくした津曲は大博打を打った。土佐猫を作った。40万個も。ヒットエンドランやのにホームランを打とうとしたんや。土佐猫は全然売れなんだ。事務所は土佐猫の在庫でいっぱいになった。(第134話)

やや年配の印象を与える否定表現であるが、三世代同居による影響を演出したものかもしれない。

一点気になったのが、第121話でナレーションとして祖母廉子によって語られた「愛が足りないのです」である。共通語であれば「足りない」であるが、五段動詞の「足ル」を用いる岐阜県のネオ方言としては「タラナイ」である。意図されたものであれば、細かな演出である。

上のような否定辞の使用は、毎回、西日本的な印象を与える要因となっている。今回、東京局製作でありながら、岐阜方言の西日本的特徴をもっとも印象づけるドラマとなったもうひとつの形式が、指定辞の「ヤ」であった。

- ・ 律：鈴愛！大丈夫？  
鈴愛：何かふらつとなった。  
律：めまいかな。  
鈴愛：もう平気や。治った。(第8話)
- ・ 宇太郎：痔にな。あれ（おしり洗浄機）いいらしいんやと。俺も最近ちよつと怪しいもんな。  
仙吉：でも高いんやる？ よう分からんし、使い方とか。(第8話)

老若男女を問わず指定辞は「ヤ」が用いられているが、鈴愛の幼友達である律だけは、同級生と話すとき以外は、それがたとえ故郷を舞台としていても、頻繁に指定辞として「ダ」を使う。

- ・ 律：平気だよ。鈴愛は思ったまんまだから。そこが...いいとこだから。  
晴：律君みたいな子が友達で鈴愛は幸せやね。ありがと。(第9話)
- ・ 鈴愛：ずっと耳鳴りがするんだけど海の音に似とる。ザ～ッて。  
律：それは潮騒つていうんや。(第10話)

ただ、同級生相手にも「ダ」を使ったり使わなかったりしており、律がもっとも「ダ」と「ヤ」を併用している人物であると言える。これは、良家の子息で秀才とのキャラクター設定によるものかもしれないし、性格を表したもののなにかかもしれない。他にも、鈴愛相手に「俺はもう鈴愛のマグマ大使じゃないんすよ。ダサくて情けないんすよ。無理して元嫁に花とか送っちゃってさ」(第139話)と気取ったりするなど、発話内容によってもスタイルが切り替えられている。いずれにしても、「ダ」と「ヤ」の切り替えひとつでも意味は持ちうる。第140話でも、律が急に「岐阜弁」にシフトして友人の正人に指摘されるなど、今回のドラマで意図されたかどうかは別として、頻繁に切り替えが見られたことは事実である。

なお、推量の表現としては、「ヤロ」あるいは「ヤロー」が用いられた。NHK岐阜放送局ご当地サイト「半分、青い。」の「使える！岐阜ことば講座」(第6回)には、「ホヤラ」が「相づちを打つ言葉として使われる」と紹介されている(<https://www.nhk.or.jp/gifu/hanbunaoi/kotoba/06.html> : 2018.12.26 確認)が、東濃方言として一般的な推量の助動詞表現「ヤラー」は、ドラマ中で使用が確認できなかった。岐阜大学の学生の間では、「もっともかわいり」

岐阜方言として認知されているだけに残念である。

否定辞及び指定辞と同様に、今回、意図的に用いられた補助動詞表現が、「～てしまう」の意味の「～テマウ」である。特に、過去の「～テマッタ」は頻用された。

- ・ 鈴愛：フフッ。それで奥から2番目のトイレに行ってまった。(第6話)
- ・ 鈴愛：嘘はついてない。鈴愛は知っとる。お母ちゃんが何でパーマかけんか。ゴアになってまうからや！(第8話)
- ・ 和子：18歳までかな。律が東京出てからは何となくやらんくなってまった。(第124話)
- ・ 弥一：鈴愛ちゃん。律がおらん。どっか行ってまった。(第126話)
- ・ 律：お前も親になったなあ...  
鈴愛：なった... なってまった。  
律：何で「なってまった」や。  
鈴愛：あのころの鈴愛とは違うって事や。(第131話)

岐阜の人物であることを印象づけて描く形式として、この補助動詞表現は幅広い登場人物に頻用されている。その中で、鈴愛の口癖として用いられるのが「ヤッテマッタ」である。第一週だけでも、第2話を除いてほぼ毎日、鈴愛は「ヤッテマッタ」と言っている。それどころか、上で指定辞に「ダ」を頻用すると指摘した律でさえ、「ヤッテマッタ」を使用し、時に、他の動詞に付加された補助動詞としても用いる。

- ・ 律：もともと思っとること言葉にするの下手やし。相手にガーッと言われると黙ってまう... (第131話)

しかし、この「ヤッテマッタ」は、本来、東濃方言ではない。岐阜県内で「～テマウ」が記述に残る東端は中濃南部の関市であり、脚本家北川悦吏子の出身地である美濃加茂市にも記述は見られない。東濃の記述としては、『多治見のことば』にある「シチマッタ」と「ヤッチャッタ」が見られるのみである。実際、土岐市の市民大学で2018年11月3日に挙手による調査をした際にも、「～テマウ」を使用すると答えた人は、100名ほどのうち僅かであり、伝統的な東濃方言ではないとの証言も得られている。

一方、学生の調査によると、若い世代では東濃地方でも「～テマウ」が違和感なく用いられているとの結果も得られている。岐阜大学国語教育講座3年上野綾子・北風佳子の調査(2018年7月)では、東濃出身、または東濃に在住歴がある330人(内訳:10代以下54人、20代140人、30代44人、50代35人、60代9人、70代3人)にグーグルフォームと紙媒体を用いてアンケート調査をおこない、「ヤッテマッタ」を「よく使う」109人、「まあまあ使う」113人、「聞くが使わない」80人、「聞かないし使わない」26人との結果を報告している。実に3人に2人は使用するという結果である。「東濃地方」にも地理的な側面から方言に幅があることはすでに述べたが、年代差も生じている可能性は大きい。インターネット調査の信憑性と合わせ、今後、詳細な調査が必要となろう。

さて、ドラマでもっとも方言を特徴付けるのは、もっとも文末に置かれる終助詞であるが、今回のドラマにおいては、主人公鈴愛がほとんど使用していない。特に、「～(んだ)よ」に相当する表現としての「～(ンヤ)テ」は、たとえ、それが相応と考えられる場面でも使用されない。

- ・ 鈴愛が扇風機のアイディアを説明するシーン  
鈴愛：だからね、扇風機の風を一回壁にあてるんや。そいでその風を浴びる。風がやわらかくなる。(第144話)

方言指導を担当した俳優尾関伸次は、「(前略)敬語だと方言のニュアンスが出にくいので、(鈴愛役の=筆者註)芽郁ちゃんとは普段の会話でもタメロで話そうというルールを徹底しました(BIGLOBE ニュース2018/6/30ポストセブン)」と述べている。タメロのひとつの特徴であるモダリティ形式がそぎ落とされた終止形で言い切ることによって表現されるぶっきらぼうさを主人公のキャラクター設定に入れることで、終助詞使用を回避した可能性は指摘できよう。終助詞使用は、方言話者であることを強く印象づける反面、待遇を含む使用者の対者意識を表



出しやすい諸刃の剣である。終助詞の不使用もまた、このキャラクター設定の一部と捉えられる。

ほかに、次のような表現も観察された。

- ・ 鈴愛：言わないと怒られる。うちのお母ちゃんは恐ろしい。川に律が落ちた事もど叱られた。  
律：ど叱られたか。何ともなかったんだからいいよ。(第7話)
- ・ 花野：かのうん。ここに、ここにあるのに出てこない。何回もやってまった。カンちゃんとジイジの約束。ママとパパにはないしょ。怒られる。ど叱られる。  
律：ど叱られるか。そうか... (第129話)

関西系の強調の接頭辞「ド」は、「ドダワケ」など当地でも卑罵表現として頻用される。また、第129話は、鈴愛の娘である花野が、東京に住んでいながらも母親のことばを受け継いでいるという設定である。同郷の律がそれに驚きながらも感概を示している点は、ドラマにおける方言使用が、単なる地域性の表示だけでなく、現代における方言が地域人としての絆を繋ぐ象徴となっていると指摘できる。

補助動詞では、進行の「～トル」が一般的であるが、皇太子の写真を撮ったこともある(第3話)律の父弥一は、時々「～テル」を用いる。「マヨッテル」のアクセントも、共通語と同じ「ヨ」にアクセント核が置かれていた。若い頃、東京で写真の修行をしたことを仄めかす時まで言ったらいいすぎだが、スタイルが切り替わる理由はあろう。一方、東濃地方で用いられる進行の「～ヨル」は、数は少ないが何回か用いられた。

- ・ 晴：寝とるか、この子。  
宇太郎：最後のおかあちゃんのおなかの中を味わとるんやないの？ (第1話)
- ・ 宇太郎：重版かからんな。  
晴：かかとる巻もあるよ。  
宇太郎：新刊はかからんな。草太が言いよった。重版がかからんようになったらやばいって。(第70話)
- ・ 晴：おかあちゃんはあんたを産むまで、腎臓悪かったし、ちゃんと生まれてきよら一すか、心配で心配で... (第6話)
- ・ まさこ：オックスフォードとスタンフォードは知とるよ。  
弥一：あれ何か迷とてるのか？  
律：うん...まあまだ決定じゃないし。打診だから。(第128話)

鈴愛の母、晴は、この他に第120話と第122話で「イーヨッタ」を用いている。過去の習慣的動作を表す用法である。ただし、第6話の「生まれてきよら一す」、ならびに、第136話の宇太郎の「鈴愛、帰ってきよらっせるか」は、どう解釈してよいのか不明である。そもそも、自分の娘に対して敬語は用いないし、後者はとくに「ヨル」を用いる理由がない。娘に「帰ってきつつあられるか」などは、皮肉としても意味が通じない。この「ヨル」は、持続の形式ではなく、「珍しい言い方」としてちりばめられたにすぎない。

文法表現の特徴をいくら挙げても際限がないが、紙幅も尽きてきたので、簡単に記しておく。

- ・ 菜生：スズ！ はよ来やー！ (第20話)
- ・ 鈴愛：これでええ！ こうしたら律には私は見えん！ 美人を想像してもらおう！ 大人になって漫画家デビューしてすてきになったおしゃれになった私を想像してもらおう！  
律：やめれ。お前は相変わらず突拍子もないな。突拍子もない。(第73話)
- ・ 貴美香先生：打撲は大した事ないけど、あの年代はナイーブやで気を付けたってよ。(第6話)

「～ヤー」は、名古屋由来の軽い敬意を表す形式である。一段動詞のラ行五段化現象「ヤメレ」は、岐阜県内では、飛騨地方と東濃地方に見られる。最後の、原因・理由の接続助詞「デ」の使用も、全県的に確認できる。ラ行五段化現象以外、例は挙げていないが一段動詞可能形の「ら抜き」を含めて、ドラマで頻繁に用いられた。

以上、ドラマで用いられた文法的特徴について見てきたが、方言らしさの表現装置として活用されつつも、やや正確さを欠く点が指摘された。これもドラマの方言としての妥協点なのであろう。

## 5. おわりに

上記指摘してきたとおり、NHK 連続テレビ小説「半分、青い。」は、さまざまな岐阜方言を用いて岐阜県らしさを十分に表現しつつも、一方で、東濃方言にない特徴や新しい方言の特徴も多く盛り込んだ作品となった。

東濃方言にない特徴が使われているからといって、決してドラマの価値を貶めるものではない。ドラマという虚構において、方言は登場人物の属性を表す小道具である。そこで重要視されるのは、方言そのものではなく方言を語る人物である。何より役者としてその人物が十分に表現されなければ、ドラマとして見る価値が低くなってしまふ。ドラマの方言は、味噌汁の具材ではなくダシの一種にすぎないのである。

また、方言の使用は、地域差や年代差はもちろん、個人差もあることは言を俟たない。今回、詳細な比較はできなかったが、科研費で整備している談話資料においても、「～テマウ (～てしまふ)」の東濃地方における使用が稀であることを確認はしている。この点は、今後、実際の方言談話と照合することで、より明確になるであろう。課題として検討していきたい。

### 【付記】

本研究は、日本学術振興会科学研究費基盤研究(C)「昭和40年代採録岐阜県方言談話資料作成とその分析」(課題番号 17K02771、代表:山田敏弘)ならびに同基盤研究(A)「日本語の時空間変異対照研究のための『全国方言文法辞典』の作成と方法論の構築」(課題番号 26244024、代表:日高水穂(関西大学))の研究成果の一部である。

### 【参考文献】

- 小林隆(2004)「アクセサリーとしての現代方言」『社会言語科学』第7巻第1号
- 多治見ことば編集委員会/編(1974)『多治見のことば』多治見市教育研究所
- 山田敏弘(2017)『岐阜県方言辞典』岐阜大学

参照したインターネット記事の URL 等は文中に示したとおりである。